住吉祭礼図に見る中近世の風俗

メモ）鉄本　2023.04.20

住吉祭礼図に描かれている衣食住に注目し、慶長から江戸初期の風俗を眺めてみます。

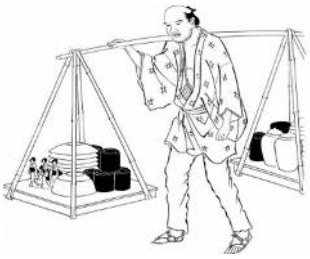
描写からは細かい品物などが判別しにくいこともあり、少し想像を入れてまとめております。祭礼図が描かれている時季は夏であること、祓いの季節であることを踏まえ、それに因む商品が売られていると想像しました。

1．商売

（1）振売り

店舗を持たない商人が品物を天秤棒で担いで、呼び声を立てて売り歩くことです。「棒手振　（ぼてふり）」と呼ぶこともある。行商には近場を廻る振売りと、近江商人や富山の薬売りのような全国廻りするものがある。

①瓦器売り？？　碗売り？？



【説明】陶器を使うようになったのは近世からで、それ以前は椀類が食器に多用されていた。椀の木地は、欅が上、栃が中、ブナが下。形によって、宗和椀、遠江椀、唐椀、丸椀に分類される。古椀を買い集めて古道具市に持って行く商いが天正年間（1573～92）に始まった。

②心太（ところてん）売り　又は　枇杷葉湯売り

【説明】夏場の商売。江戸では心太に砂糖か醤油、京坂では醤油をかける。砂糖は室町時代まで輸入品であった。製糖法が伝わったのは慶長年間（1596～1615）で、最初は奄美大島に伝わった。その後、琉球、薩摩、高知に広がり、18世紀初めには、伊豆七島、和泉、讃岐、阿波で盛んになった。

ビワの葉に肉桂、甘草などの生薬を配合した枇杷葉湯は暑気払いの妙薬として売られた。京都烏丸で発祥し全国に広まった。ビワの葉には咳・痰の鎮静効果、鼻づまり・炎症を鎮める効果があり、漢方処方に用いられる。

③冷奴売り？

【説明】江戸の豆腐売りは、前荷に白い箱を置いているのが特徴。京坂では箱に屋号を書いている。『堺鑑』には、堺津の豆腐は美味で天下一品、江戸のものは硬く、色も白くなく不味いとの記述がある。豆腐の初見は、寿永2年（1283）奈良春日大社で、永く奈良の名産であった。中世以降は水が清く寺の多い京都に根付いた。南禅寺境内の湯豆腐は有名。豆腐は、早くから大衆化したことにより、茶人は豆腐かす（おから）を茶料理に使った。（『宗及他会記』に記述）

④かき餅売り？？　あずき汁売り？？

【説明】6月朔日は「氷の朔日」といい、氷や氷水で冷をとる季節である。土用の入りには、各地でニラやヒル、アカアズキを飲む風習がある。他に、土用餅として、餡ころ餅、カキ餅、氷餅、お祓い団子が売られることもある。屏風絵には移動式竈のようなものが描かれているので土用餅類の売り手か。
＊移動式竈は古墳時代から見られる。上右の写真は大坂城跡下層出土の8世紀後葉の移動式竈。

（2）店売り

屏風絵には、反物屋、足袋屋、桧物屋など20軒余りの商家が描かれている。その中から店売りの内容が判るものを拾ってみる。

①檜物屋

【説明】曲（まげ）師とも呼ばれる。檜、杉、竹などを薄く剥いだものが材料。多くは柾目に剥いだ檜を薄く削り、火にあぶるか湯につけて、なめして丸形に曲げ、合わせ目を桜の皮で縫いとめる。
『左海鑑』（元禄頃）によると、籠屋が11軒、樽屋が148軒あった。
当時、「堺樽」は全国ブランドで、大形のものが作られ酒蔵の発展に寄与した。

②糸屋

【説明】堺の繊維産業は、日明貿易で栄え、染織技術面で京都西陣に影響を与えた。江戸期になると西陣が発展しその陰となり、江戸中期には和泉木綿の集散地としての性格が強くなる。『左海鑑』によると、分糸屋8軒、呉服絹布屋92軒、木綿問屋13軒、木綿屋50軒、木ワタ屋88軒、織殿屋167軒、青染屋99軒などとなっている。堺では、生糸→染色→織り→生地と、一貫生産が行われた。

③薬種商

【説明】『左海鑑』によると堺には元禄初め頃は薬種商が77軒もあり、江戸中期になるとさらに150軒余りに増えている。小西家、高三隆達家も薬種商だった。江戸期には拠点を大坂に移した薬種問屋も多い。因みに、医科としては、本道医師55人、目医師12人、歯医師2人、針立28人。西湊町にある「片桐棲龍堂薬局」は桃山時代から続く漢方薬専門の老舗です。

④質屋

【説明】金融関係としては、『左海鑑』(元禄頃)によると両替屋5軒、銭屋15軒、質屋114軒であったものが、享保13年(1728)には、両替屋30軒、質屋135軒となっている。農産物の集散地を背景に、為替、両替など金融機能が高まっていることが示されている。
質屋は株を買って開業。質屋の掟書には、遺失物や御紋の品は質物にしないとあり、8ケ月で質物が流れるという規則が書かれている。正規の質屋とは別に、質札を出さずに物をカタにとるモグリの脇質、鉄火質が横行した。

2. 名物土産　(『摂泉境小鑑録』に掲載されている「古今名物」)

①繊維・衣服・装身具:　撰糸絹、金紗、南荘堺織紗綾、織殿屋三百四十、糸ヤ町真田織、一休鳥絵ノ扇
天神前櫛、塗木履、雪踏(せった)

＊雪駄は千利休の工夫と言われている。

②食品・たばこ・薬:　湊壺塩、鬼煎餅、紅葉豆腐、前魚、舳松瓜、鯨、和泉酢、酒、醤油溜、
鯷(ひしこ)漬、反魂丹

＊「鬼煎餅」 寛永(1624～44)頃に、海会寺前で売られた煎餅。1枚ずつ箸で焼いた。

＊「紅葉豆腐」 京坂の豆腐は絹漉で柔らかく白く美味、江戸のものは硬く不味いという評価だった。
豆腐に紅葉の形を印し、「買様(こふよう)」と「紅葉」を掛けたともいわれている。

＊「前魚」とは住吉大社前の浜、又、西宮戎前の浜で揚がった魚(代表は桜鯛)で3月～6月頃のもの。

＊「鯷」とは「ひしこいわし」のことで「カタクチイワシ」の別名。これを塩漬けにしたものが鯷漬。

③住居・生活具： 常器椀、付硫黄

＊「常器椀」とは飯盛り用の日常用いる椀。

④建築： 数寄屋天井菰（こも）、山口筋大工墨汁糸

⑤金属・窯業： 鉄砲、出歯（刃）包丁、御方包丁、土居原鋸、甲鉢鍛冶、秤屋、風炉立土器、漆土器

＊「御方包丁」とは「タバコ包丁」のこと。鍛冶職人が妻に手伝わせて作ったところから名付けられた。

＊「風炉立土器」とは、小さい溶解坩堝を加熱する炉のこと。

⑥その他の工業・販売業： 湊紙、白粉、白炭、朱座、馬尾篩（ふるい）、櫛屋町算盤、雛、目薬貝、蛳（ばい）

＊「湊紙」とは湊村（現在の東・西湊町）で漉かれた襖や壁の腰張りなどに用いる鼠色の和紙。

＊「目薬貝」とは目薬を容器代わりの二枚貝に入れたもの。黒田官兵衛の祖父が目薬で財を成したという。

＊「蛳」とは、「にし」、「にな」のことで巻貝の総称。タニシ、カワニナなど。

⑦不詳： 鯛樗腌、髪、辛子

3. 装い

（1）庶民の衣服

小袖は、平安時代は貴族の下着であったものが、鎌倉時代以降上着として用いるようになったもの。

屏風絵に描かれているものは、殆どが「小袖」。時代により、身幅、袖幅、模様、染織の変化がある。

時代	通称	特徴
①室町～桃山時代	桃山小袖	男女ともに身幅が広い。対して袖幅が非常に狭い。女性の小袖は、刺繍、辻が花を多用し大胆で派手な柄・色使いのものが多い。
②慶長～寛文年間	慶長小袖 寛文小袖	身幅と袖幅が同じ幅になってくる。また、身丈も踵に達するくらい長くなる。緞子、紗綾、縮緬、ビロードなど多様な織物が用いられる。特に綸子は小袖生地に多用された。色彩は、地に紅、白、黒、黒茶などの色を用い、色調が桃山小袖に比べて暗い。模様は、小袖全体を一つの画面とした絵画風の大胆な模様となる。 染織技術は、絞りと刺繍が主流。
③元禄年間	元禄小袖	友禅染が小袖染織に革命をもたらす。小袖は飛躍的に華やかなものとなり、模様は精緻さを増した。

桃山小袖

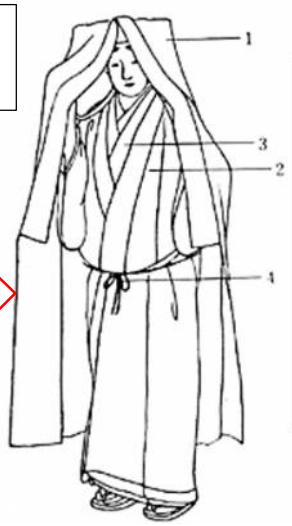
慶長小袖

寛文小袖

元禄小袖

画像出典：京都工芸染匠協同組合の HP　及び　風俗博物館の HP https://www.iz2.or.jp/top.html

16世紀後半の富裕層の奥方の外出姿



1＝被衣（かづき）：被り易いよう襟が付く。
2＝掻取（かいどり）：礼服で長小袖。
3＝間着（あいぎ）
4＝被衣に付けられた結び紐。

振袖姿の女性は、礼装の町屋の娘か。

(2)髪型

①女性の髪形　　参考 HP：江戸の日本髪 (edononihongami.com)

庶民の女性は活動し易い小袖に合わせて、髪を後ろで束ねるスタイルになっている。室町時代末期から江戸時代になるにつれて、髪をまとめて巻くようになる。屏風絵には「根結い垂髪」（ポニーテイル形）が多く見られる。

平安～室町時代　⇒　安土桃山時代　⇒　江戸初期　⇒

【垂髪（すいはつ）】

【根結いの垂髪】
ポニーテイル形

【唐輪髷】
元は男性の髷

【兵庫髷】
兵庫の遊女から一般に普及

江戸前期　⇒　江戸中期　⇒　江戸後期

【島田髷 初期】
若衆の髪形を島田宿の遊女が取り入れ

【勝山髷】
遊女勝山が始めた髷
後に「丸髷」に変化

【島田髷　中期】
島田髷は多様化し
12種類以上ある

【島田髷　中期】

つぶし島田

高島田

＜屏風絵に描かれた女性の髪型＞

唐輪髷か兵庫髷に見える。場所が「北之橋」であり、北旅籠町付近の住人と思われる。高須遊郭に近く、場所柄と髪型から遊女と思われる。

屏風絵の殆どの女性が「根結いの垂髪」(ポニーテイル)である。
垂髪の女性も
1人見える。

②男性の髪形

男性の髪形は変化が少ない。平安時代には一髻(ひとつもとどり)という髪型があるが、文献や絵画には冠を外した姿で描かれているものは殆どない。

平安時代～室町時代　⇒　安土桃山時代　⇒

【一髻】(「いっけい」とも発音)

肩まで伸ばした髪を頭上で束ねたもの。
日常は冠や烏帽子の下に納める。

(伴大納言絵巻より)

烏帽子の姿

【月代(さかやき)】

戦国時代に兜による頭の蒸れを抑えるために
頭髪をそり上げたもの。　平時は総髪。

月代(さかやき)

総髪

江戸時代

【髷】

戦国時代には一時的に頭髪を剃った月代が
常態となる。銀杏髷は江戸時代の一般的な髷。
髷の先端を銀杏の葉のように広げたことから
その名が呼ばれるようになった。
＊丁髷(ちょんまげ)は、髪の少ない老人の髷のこと。

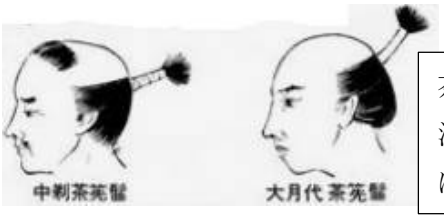
【銀杏髷】

武家

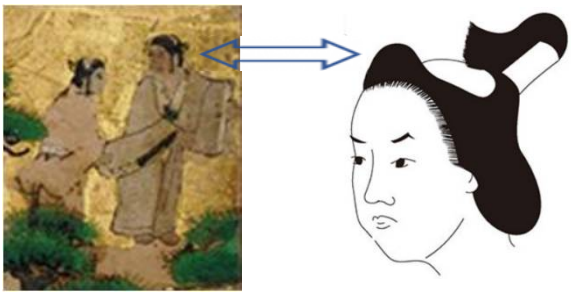
町人

＜屏風絵に描かれた男性の髪型＞

⇔



茶筅髷:安土桃山時代の若者に流行した髷で、江戸時代初期には見られなくなった。



若衆髷：元服前の男子が結った髪形。前髪を残し、中剃りをして、元結で髷を締めて二つ折りにしたもの。江戸初期に「女歌舞伎」に併行して「若衆歌舞伎」が行われており、人気の役者がこの髪型をしていた。これを島田宿の遊女が取り入れたと言われている。

(3)傘・笠・帽子

古代の傘は衣笠(きぬがさ)という貴人の頭上に差し掛ける長柄の傘として見ることができ、天蓋と同様に神聖的・装飾的意味を持つものであった。雨、雪、直射日光を防ぐ道具としては、平安時代頃までは「傘」ではなく、「笠」を用いた。大田南畝著『半日閑話』には、「傘は堺の町人納屋助左衛門琉球に渡り、呂宋に至り、文禄3年(1594)帰る時、傘蝋燭千挺、麝香(じゃこう)弐疋、秀吉之獻る。是より始まる。」とある。この傘は、現在の傘の構造に近く開閉できるものだったと言われている。

江戸中期頃までは主に日傘としての利用であり、「絵日傘」、「蛇の目傘」として女性の間に流行した。

雨傘としての利用は、18世紀に安価な「番傘」に植物性の油を引いたものが作られて以降のことである。

【参考】太田南畝：寛延2年(1749)～文政6年(1823)。号は蜀山人。

①傘

【説明】屏風絵からは、開閉できる構造の傘のようである。

・文禄3年(1594)：納屋助左衛門によって「ろくろ式」傘の輸入

＊「ろくろ」は傘を開閉する際に傘の柄軸をスライドするパーツ。

・寛文12年(1673)～元禄元年(1688)：「絵日傘」が流行

・元禄年間(18世紀)：「蛇の目傘」が登場し流行、「番傘」が登場

＊「番傘」は大坂の大黒屋が印や判を付けた傘(判傘)が始まり

・18世紀中期：青色の紙を張った「青日傘」が女性の間に流行

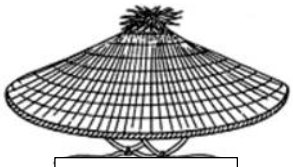
②笠

【市女笠(いちめがさ)】元は市女が用いたもの。菅や竹皮で編んだ笠で、中央部の巾子(こじ)を高くし黒漆を塗ったもの。深浅2種ある。晴雨両用。平安中期以後、主として上流社会で男女共に用いられた。

【菅笠(すげがさ)】菅を材料とした縫い笠の総称。平安時代の市女笠、桔梗笠、江戸時代の殿中、一文字、平笠、三度笠、加賀笠、ざんざら笠などは菅の縫い笠である。形には、円盤形、円錐形、円錐台形、帽子形、光円球形、褄折形、桔梗形などがある。

一文字笠＝殿中笠

三度笠



ざんざら笠

加賀笠

托鉢笠（網代笠）

【烏帽子】 左の画像を参照

上左＝立烏帽子：六位以上の公家が用いる正式なもの。正面中央に「敬」と呼ばれる凹みを作ることが特徴。

上右＝冠は纓（えい）が下に垂れる「垂纓冠（すいえいのかん）」と巻き込む「巻纓冠」の2種がある。前者は文官用、後者は武官の束帯用。屏風絵は文官用。

下左＝人形浄瑠璃の黒衣の頭巾に似ているが？？

下右＝菅の立山笠：

モンゴル帽子？？？

【南蛮人】

1＝帽子

2＝ラッフル（ひだ）

3＝ケープ

4＝トランクフォーゼ（ズボン）

4. 道具類

①見台？？

タコ足

常磐津用

清元用

【説明】見台（けんだい）は、室町時代頃から見られ、台本を読みやすいように乗せるもの。浄瑠璃は、義太夫、常磐津、清元の流派に分類される。見台は、流派により形が異なり、常磐津の場合はタコ足と呼ばれる赤く三本足のタコ見台を用いる。清元用は黒塗りの一本足。義太夫用見台は黒の台に金蒔絵が施され正面に紋を入れ、太い白の房が垂れています。

屏風絵のものは色が赤くないが常磐津用にみえる。但し、常磐津は延享4年（1747）に創始されており、屏風絵が制作されたのは17世紀前半頃なので時期が合わない。

②唐櫃

【説明】当初は衣服を入れるものであったが、後に、経文、図書、甲冑（具足櫃）を入れる櫃となった。一色塗、素木製、蒔絵のものがある。大別して、長唐櫃と「荷い櫃」がある。前者は長持のように2人で担ぐ。後者は前者の半分で短く棒の両端に掛けて1人で担う。

5. 交通機関

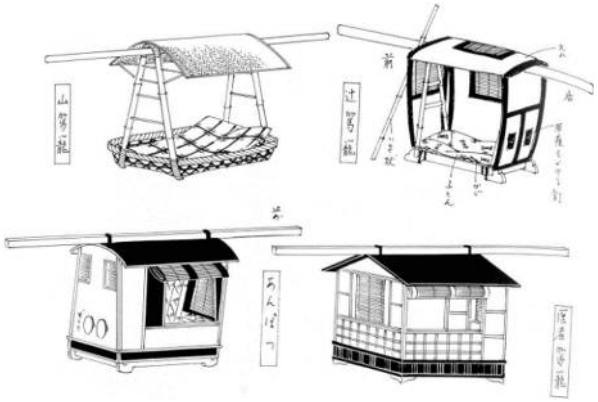
（1）駕籠

駕籠は武家・公家用の高級なものは「乗物」と称し、庶民用のものは「町駕籠」と呼ばれた。

①乗物

【説明】乗物には、将軍・大名が乗る「溜塗り惣網代」（ためぬりそうあじろ）、武士が乗る「権門駕籠」（けんもんかご）、大名家の女性が乗る「女乗物」があった。屏風絵のものは、御付が女性なので「女乗物」にみえる。

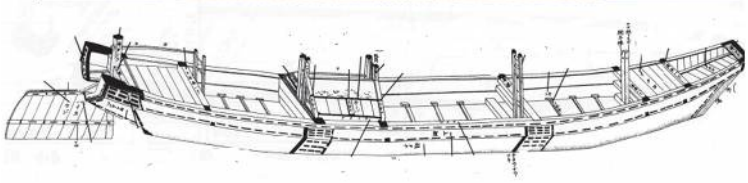
②町駕籠



【説明】駕籠には、高いクラスのものから順に、豪商や医者が使用した「法仙寺（ほうせんじ）駕籠（上図右下）、部分的に塗りが施された中級の「あんぽつ駕籠」（上図左下）、最も一般的で辻駕籠とも呼ぶ「四ツ手駕籠」（上図右上）、山道用の「山駕籠」（上図左上）があった。屏風絵のものは「法仙寺駕籠」。

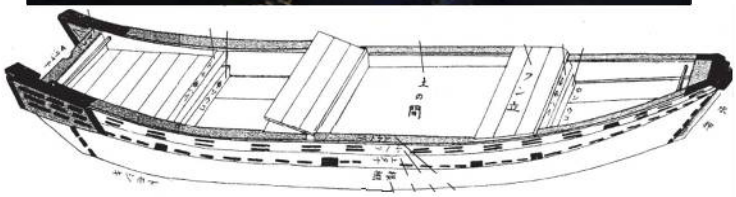
(2)船

①ひらた船



【説明】ひたら船
長さ:15～22m程度
幅:3～4m程度
喫水が浅く細長い型の船。就航する河川の状況によって、船型、構造、大きさを変えた。舵を持つ。

②似土船(土船は土砂を運ぶ船。)



【説明】土船
長さ:8m前後
幅:2. 4m程度
形は土船に似るが、多目的に利用されている。
舵はなく、竿で操船。

【説明】船の科学館叢書『船鑑』によれば、日本の川船は、高瀬舟に代表される大型船(長さ27～15m)、艜(ひらた)船に代表される中型船(長さ14～8m)、渡船に代表される小型船(長さ7m前後)に分類される。

(3)乗掛馬・三宝荒神

【説明】井原西鶴の『好色五人女』に「三宝荒神」という言葉出てくる。乗掛馬の背の左右に櫓を置き三人乗ることを言う。三宝荒神の借馬は五畿内近江限定であったが、伊勢参りの客がよく利用した。＊乗掛馬は宿駅に置かれ、1人と20貫目の荷物を運んだ馬。

5. その他

(1)按摩

【説明】按摩は盲人の主要生業。盲人の位には座頭、勾当(こうとう)、別当、検校(けんぎょう)があった。検校は最上位。位によって杖の材質も異なる。検校は撞木(しゅもく)杖が許された。屏風絵のように町を流す按摩は「振りの按摩」と言い、京阪では夜だけ、江戸では昼夜ともに流した。

(2)神事相撲・奉納相撲

【説明】史実としての最初の相撲は、皇極天皇元年(642)に行われた百済の使者をもてなすための相撲である。(『日本書紀』)
朝廷が行う儀式「相撲節(すもうのせちえ)」は天平 6 年(734)の聖武天皇の天覧相撲が始まりである。中世に」入ると、武士の間で盛んになった。この時期まだ土俵はなく、相手を倒せば勝ちであった。土俵が出来たのは 18 世紀初頭頃である。
住吉大社の「相撲会」では、相撲10番、童相撲3番が行われた。

弥助か？

【閑話】堺市博物館所蔵の「相撲遊楽図屏風」に、黒人らしき人物が描かれている。この人物は、織田信長に仕えた「弥助」と思われる。弥助はイエズス会のヴァリニャーノの黒人従者で出身地はモザンビーク島。弥助はゴアの聖パウロ学院で学問を学び、さらに砲術訓練も受けた。信長は彼を武士として取り立て屋敷を与え傍においた。松平家忠の日記に身長180cm、武田攻めに参加した記録がある。本能寺の変で明智軍と戦った後に投降。光秀に許され南蛮寺に預けられ、その後、キリシタン大名有馬晴信陣営で大砲を操作。加藤清正の家臣宛書簡には弥助には妻子があるとの記述。

【参考文献】

・『江戸庶民風俗図絵』 三谷一馬　三樹書房　1999
・『図説　江戸時代食生活事典』 日本風俗史学会編　雄山閣出版　1978
・『定本　江戸商売図絵』 三谷一馬　立風書房　1986
・『江戸時代　生活・文化総覧』 西山松之助ほか　新人物往来社　1992
・『堺研究』第43号　堺市立中央図書館　1991
・『堺研究』第44号　堺市立中央図書館　1992
・『相撲の歴史　堺・相撲展記念図鑑』 堺相撲展実行委員会　1998
・『江戸職人図聚』 三谷一馬　中央文庫　2001
・『大阪と堺』 三浦周行著/浅尾直弘編　岩波文庫　1984
・『図解　江戸時代』 歴史ミステリー倶楽部　三笠書房　2015